

コロナ禍における県境地域づくりの考察 - 「信越県境地域づくり交流会」の取組を通じて-

内海 巖 (上越市創造行政研究所)

1. 信越県境地域づくり交流会の概要

(1) 昨年度までの活動経過

「信越県境地域づくり交流会」は、長野・新潟県境をはさむ広域エリア(図1)を対象とする地域づくりに関する学習・交流プラットフォームであり、上越市役所の自治体シンクタンクである上越市創造行政研究所、広域観光組織である雪国観光圏及び信越自然郷の三者による実行委員会で運営を行っている。



図1 信越県境エリアの位置

筆者らは、2015年度から年1~3回のイベント開催を中心に活動を行ってきた(表1)。各回とも信越県境地域に共通する地域課題や地域資源をテーマに取り上げ、当該地域内の地域づくり実践者等によるトークセッションや情報交換会などを実施しており、これまでに延べ16テーマ、80人を超える登壇者による話題提供をもとに、各回100人前後の参加者とともに学びと交流を深めてきたところである。



写真1 信越県境地域づくり交流会の様子

この活動を通じて、広域・異業種の関係性を足掛かりのない状況から構築し、多様な地域づくり人材を発掘し、日常的に得難い学びと交流の機会を創出した点においては、一定の成果を得られたものと評価している。

表1 信越県境地域づくり交流会の開催実績(2015~2019年度)

年度	回	開催地	トークセッションのテーマ
2015	1	新潟県上越市	・地域資源 ・グリーンツーリズム ・ライフスタイル ・観光組織経営
2016	2	長野県飯山市	・食文化 ・インバウンド
2017	3	新潟県十日町市	・老舗企業 ・鉄道
	4	新潟県上越市	・歴史文化 ・リノベーション
2018	5	長野県栄村	・ロングトレイル
	6	長野県飯山市	・スローフード
	7	新潟県上越市	・ミュージアム
2019	8	長野県山ノ内町	・ガストロノミーツーリズム
	9	新潟県十日町市	・雪国文化
	10	新潟県上越市	・プラットフォーム(オープンイノベーション)

※第10回は延期

(2) 第10回地域づくり交流会の延期

2019年度は、交流会としての機能強化と継続性の両立を目指し、来年度に向けて会の再編成を検討していた。2020年2月の第10回の地域づくり交流会では、イノベーションやプラットフォームをテーマにした特別講演やトークセッション、当該地域の魅力的な特徴を発掘する研究企画発表会をプログラムに組み込むことにより、次年度の交流会のプログラムはこの開催結果を足掛かりに検討する予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス対策の一環により、開催3日前に延期の判断を下すこととなった。

2. 2020年度の活動実績

ーコロナ禍における県境地域づくりの再編成ー

(1) オンラインセミナー等の開催

本交流会の成果は、いわゆる「越境」と「3密」の効用によるところが大きい。しかし、周辺自治体との物理的な距離や感染状況に関わらず、あらゆる機会ですべての県外への外出自粛や「県内限定」などの声が目立つなど、これまでにない県境の壁の高さを実感した一年となった。このことから、会のコンセプトである「まなぶ・つながる・はじまる」を実現するためには新たなプログラム設計が求められた。

検討の結果として、今年度はオンラインによるセミナーを計8回開催した(表2)。セミナーの開催に当たっては、開催目的を踏まえた開催手法の検討はもとより、オンライン環境の整備や当日の運営などを含めて試行錯誤の1年であった。また、対面型コミュニケーションの意義を再認識する中で、各回の状況に応じてオンライン方式と対面方式の異なる組合せを追求したため、事務の煩雑さを招いた側面もあった。しかし、コロナ禍以前からの課題であり広域・異業種交流の特徴でもあった日程調整の困難さは、これにより改善されることとなった。

このうち、前半3回の連続セミナーは、第10回地域づくり交流会として計画していたプログラムの一部を分割開催したものであるが、全8回とも交流会の新たな形態の一つとして今後の継続を見据えた活動となるよう留意した。

(2) トークイベントを起点とした地域研究への展開

今後はこのトークイベントを起点として、Webやメール等によるイベント開催結果のフィードバックや追加情報の蓄積、それらの情報を活用・発信する地域研究(図2)などにつなげ、オンライン方式と対面方式を織り交ぜた継続的な学習・交流の場を提供していくことを想定している。

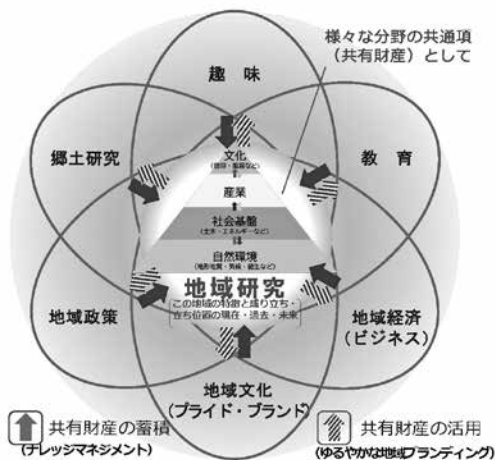


図2 地域研究の目的と位置付け(概念図)

この地域研究は、当初2019年度に企画したものの諸般の事情により十分な活動を行えなかったものであり、実質的には来年度からの仕切り直しも意味する。

すなわち、トークイベントを起点としたこの展開が実現すれば、単なるコロナ禍への対応にとどまらず、コロナ禍前の課題を改善する、より積極的な意味合い

表2 2020年度の主な活動実績

①連続セミナー「地域づくりとプラットフォーム」

回	開催日時/テーマ
1	8/18 (火) 活動紹介①
	3×3lab Future (東京都千代田区)
2	9/29 (火) 活動紹介②
	シビックイノベーション拠点スナバ(長野県塩尻市)
3	10/10 (土) 活動紹介③
	Trial village/Startup garage (愛知県豊橋市)



②信越県境エリアの魅力を探るトークイベント

回	開催日時	テーマ
1	1/21 (木)	妙高戸隠連山国立公園
2	1/29 (金)	上信越高原国立公園
3	2/18 (木)	発酵・長寿県長野
4	3/1 (月)	雪国・新潟の発酵食文化
5	3/18 (木)	信越県境の大地 (地形・地質)



での再編成につながることを期待される。

3. スーパー・メガリージョン形成との関係性

本活動は、新潟・長野県境地域の取組ではあるが、特にスーパー・メガリージョンを形成する「大都市圏中間地域」において、次の視点から関係性構築の可能性を有するものと考えられる。

(1) 本活動の原点である三遠南信広域連携

本活動は、愛知大学越境地域政策研究拠点の研究協力機関として支援を受けたことに端を発するが、筆者はその以前から国内の広域連携事例に学びを求めるとして、三遠南信地域の連携事例に着目していた。具体的には、一般的な広域連携組織で行われるインフラ整備の要望活動や観光キャンペーンにとどまらず、研究や学習を伴う多岐にわたる活動が行われていることや、連携ビジョンや年1回のサミットといったプラットフォームの上に、住民、行政機関、経済界、大学、金融機関などによる重層的な交流・連携ネットワークを積み重ねていることなど、学ぶべき点は枚挙に暇がない。

越境地域政策研究拠点によって培われた研究ネットワークの中で、全国各地の越境地域政策を推進する組織との情報交換や切磋琢磨できる関係性は、極めて貴重なものと考えられる。

(2) 2つの新幹線を挟む地域における知見の共有

本地域は、1982年に開業した上越新幹線と2015年に長野～金沢間が延伸開業した北陸新幹線の両新幹線に挟まれた地域である。本活動は、この状況を競合・分断の懸念材料と見なすのではなく、連携・融合の好機と捉えることから始まっている。

また、北陸新幹線開業前後には、各新幹線駅を中心とした駅勢圏の形成に主眼を置いた数多くの広域連携組織が設立されたほか、今後の利用・整備促進を目指す沿線都市間連携などが行われていた中で、持続可能な地域づくりの視点から地勢的な側面や創発性を重視した連携を目指したのが本活動であるともいえる。

このような状況は、東海道新幹線とリニア中央新幹線の関係性においても生じる可能性があると考えられる。

(3) 地域づくり活動としての知見の共有

本活動は、広域的視点による地域づくり人材の発掘にとどまらず、シビック・プライドやソーシャル・キャピタル、ゆるやかなイノベーションや地域ブランドの醸成を目指すものである。地道な活動ではある

が、地方都市・中山間地域の活性化に向けた汎用性のある活動と捉えることもできる。

したがって、両地域において類似の取組を行い、知見を共有しながら双方の活動を発展させることが可能と考えられる。

(4) 中部横断軸の有する多様性を糧にした連携

信越県境地域と三遠南信地域を南北につなぐことで形成される中部横断エリアは、東日本と西日本の境界域に位置するほか、日本海と太平洋を結んで海拔0mから3,000m級の山々を縦断し、国内有数の積雪・降雨地帯から少雨地帯を含むなど、国内の東西南北の要素を凝縮した地域ともいえる。この自然・立地環境を背景とした多様な歴史・文化を持つ地域が相互に交流・連携を進めることは、環境・経済・社会的側面に災害時の対応を含めた持続可能な地域づくりとして極めて重要な取組であると考えられる。

参考文献

- ・上越市創造行政研究所（2018）：信越県境地域づくり交流会開催報告書2015-2017.
- ・内海巖（2019）：「信越県境地域づくり交流会」による越境地域プラットフォーム構築の試み。越境地域政策研究論集，pp.283-295. 愛知大学三遠南信地域連携研究センター.
- ・内海巖（2020）：信越県境地域の地域づくりに向けたプラットフォームの再編成 - 「信越県境地域づくり交流会」の取組を通じて -。三遠南信地域連携研究センター紀要第6号，pp.30-31. 愛知大学三遠南信地域連携研究センター.